

るまた素人相撲として回向院大相撲、則ち本場所に對するのは

○下總船橋太神宮 の祭禮相撲であらう、大祭は例年十月中旬で、當日に境内に於

て素人相撲を催すのだが、場内は總て本場所式である、唯惜むらくは四本柱が紅白で、四

神に方とれないのが遺憾であるのだ、然ど相撲の取口は面白い、先づ出場する力士は

千葉縣と東京と組合せるのだ、其の東西は

○市川の河を境に してある、東の方は小岩村小松川、本所、夫に市内の連中が混じ

る、西の方は千葉縣下、船橋、行徳、市川、中山と總て其の附近此東西は方角の正反對

だから、或素人相撲に質した、すると、爾うてイ……御座す……本場所の東西同様で……

……と、細い肩をいからして答へた。併しながら往時の相撲に、似通つて居るのは船橋の

祭禮相撲である、勸進方と寄方と別にしてある、

○勸進方は千葉の力士 て、寄方は東京の力士としてあるから、其の規定も頗る正し

い、之が他流試合であつたら喧嘩の絶ぬであらうが、關東の素人相撲は回向院前の伊勢

の海の配下に屬するので其の頭取、所謂世話人は孰れも伊勢の海の許しを得るのだ、地方

に於る相撲目代と同視されるのだから、世話人も

○無謀の力士を引率 しない、夫に力士其の者も多少斯道では知名の連中だに據つて、

敗たとて別に亂暴を働かないと云ふ事だ、乃て船橋の祭禮相撲に限つて懸賞品を、金額

で受渡すのだから相撲の勝負に興を添る、先づ二番抜きに二十錢、一番抜きに

は十錢との相場であるから、腕力の逞しい敏捷家と來たら、職業を休んでも日給になる

ので、慰み半分に相撲取りにてかける連中が多い、兩國連の明烏は先年大勝利を得て賞

金五圓餘を齎して來た、すると明烏の名は船橋全町へ響き頗る名譽を博したさうだ、夫

に習慣として可笑いのは、

○見物が東西を異 にして居る、西方則ち千葉縣下の者は、西溜りに見物をするとい

ふ規定だから、東京方は無論東溜りである、憊う云ふ側て見物其の者も東西に分離るか

ら、勝負に就いても一層に力が這入る、其の一例としたら西方力士が敗に歸すと、西溜

りの見物人は總立となり、ヨツシヨイ……と鯨波を作つて土俵際まで押寄せると夫が

爲に人波を打つやうな騒ぎが起る、不思議には別に喧嘩もしないが一時は勿々に操がし

いので臨場の警察官が警戒を加える、一ツは夫を面白がつてヨツシヨイ……く……とやらかし、相撲場は頗る雑鬧を極めるのである、話しは變るが此相撲の土俵に

◎圍繞する天幕 俗に水引と云へる物は、伊勢の海所有の物に限ると云ふ事だ、之は單に伊勢の海の繩張裡を示す爲めであるさうだ、夫に入幡講や祭禮相撲には、以前伊勢の海部屋の行司であつた小太郎と云ふ男が、何時も出張しては立行司を勤める、此小太郎だの刀根だのは多少専門家の薰陶を受けて居る、が、初心の素人から素人相撲の行司で、何處へ往ても立行司の位置を占て居るのは神田の毘達磨だ、此男は相撲狂と云れるだけあつて總てが専門家で往から可愛い、場所入りをすると同時に

◎先輩者に對して は、兄弟子さんお早よう……などの敬語を用ゆる、恚う云ふ挨拶だから軍配の戴き方も旨い、先年の事だが俵を大相撲の行司にした、すると親戚から苦情が出て遂に行司にさせる事を中止とした、聞かして愛敬のある話してはあある、また◎又向島連の行司 に佐文と云ふ男があつた、此男も毘達磨には劣ぬ行司で、熱心の餘りに年寄音羽山の弟子となり、向島連の立行司で巾を利用して居た、が、高聲を無理か

ら發音ので咽喉カタルに罹り、夫が病原となつて肺病で瘳れた、なんと驚くほどの執心ではあるまいか、之は先代木村庄之助が

◎素人相撲へ登場 して、相撲會所(目下相撲協會)から大眼玉を頂戴した滑稽談がある、庄之助が未だ十五代目を相續しない前で、庄三郎と云つた時代、素人相撲へ混つて相撲を取つた事がある、行司になる位だから相撲は頗る巧みて、何處の土俵へ往ても屹度先方の大關を破る、乃て庄三郎の雷名は素人相撲社會へ傳播した、此庄三郎へ對して片關と目されたるは、當時の賣出し俳優播磨屋市藏、(天徳を演下て江戸市中)であつた、元來市藏が俳優に似氣なく力量が逞ましく、殊更に相撲を好んで素人相撲の群に入り、何時も庄三郎と好取組であつたから、人形町の鰻屋和田平の主人が發起人となり、向島三圍境内で◎素人連大相撲興行 を目論だ、其の兩關は東方が庄三郎で西方が市藏だ、土俵其の他の構造は悉皆本場所を模し、加之に番附まで印刷するとの騒ぎだから、市中の評判は非常にあつた、此噂が何時か會所の耳に入り、庄三郎は手厳しく譴責され、之が爲めに素人連大相撲も中止となり、夫から一層相撲會所の者が、素人連に打混る事の規則が嚴

しくなつたと云ふ事だ、また常時は流行に連るものと見ゆ

◎酒落た人が金方 となつて、素人相撲を催す事が流行た、本場所木戸御免の鶴澤専系が、また小庄と云た時代の事だが、小庄の旦那筋で神田川の綿貫と云ふ通人があつた、今で云つたら御用商人のやうな側で、錢金を湯水のやうに費ふ、其の友輩で藏前の平内と呼ぶ、之また綿貫に劣らない交際家で、孰れも好角家であつたから、何時も酒席には常時の著名力士、雲龍、不知火、鷲ヶ濱などが侍つた、或時の座興から向島植清(萩の園)で素人相撲を催す事にした、當日の四本柱へ座らせたのは

◎初代大纏長吉 後に出来山(山下出来)となつた力士でまた土俵へ登る力士が主に藝人だから可笑い、吉原の幫間権平、有中、米八と例の専系の小庄などが幕の内の側で、其の他力士は落語家もあれば箱丁も交る、常に綿貫や平内のれ側去らずの藝人どもであつた、恚う云ふ挨拶だから散し相撲は、弟子相撲がやつて來て勤める、總てが本場所式だから

◎藝人力士が土俵 へ登場するにも、縋子の締込みを締るやうな事になる、締込み一

切は原庭の玉垣から借入れ、弟子相撲に締て貰つた、が、締る方が専門家だから締込みは遠慮なく締る、借て締られた者は何程力自慢でも、多寡が幫間、師匠、落語家などの遊民であるから

◎腰ばかりが締つて 肝腎の足部へ力が遣入ないので、土俵へ登ると腰が浮々として平常の伎倆を現す事ができず、果には折角の催しも茶番に過なかつた、併し其の催しの規模の大なる事は、素人相撲としては未曾有であつたと、専系老人が昔し自慢に語られた事がある、結局素人相撲の計畫は懸賞品に左右され、また懸賞品の可否に據つて、相撲場の盛衰があるのださうな、

青年力士

兩國 河邊 黒人

常陸山、梅ヶ谷、荒岩の名は片言交りの三ッ兒も既に之を知り大砲、梅ヶ谷と聞けば丁稚、お三女でも尙ほ耳を聳たつるの心あり、今の總理大臣は誰と云ふことを知らぬ人々

にても大砲は横綱、常陸と梅は大關といふことだけは必ず之を知る世のさま、天下は悉く角通を以て埋められるかと思ふほどなれど、眞の角通を尋ねれば、老込み力士の勝星と一般、誠に寥々とも云ふべきにや、相撲は午後より行き幕の内だけの勝負を見れば其にて澤山なりと大抵は午後より入場するもの多く肝腎の二三段目中に大に注目すべき取組のあることは同じ木戸錢を拂ひながら終に見ず仕舞になるものが百人中の九十九人なり口には角力好きと稱しながら矢張此味を知らずに済す人の多きこそ口惜しけれ因て此には青年力士のみを紹介して此後角力を見る人の注意を促すこととなすべし、

○野州山孝市 青年力士中にて野州山は既に世間にも名を知られ早くも既に幕の内に入りたる好力士の一人なり身長も十分あり力も相應にあり取口も鋭き方なれば先づは申し分なき力士なり其の最も得意とするは上手突張りにて氣合好き取口なれば悪るびれずして心地よし殊に力士中に一二を争ふ好男子にて双頬に鬚を湛へ愛嬌滴々たれば人氣も自づから高く今の源氏山が今泉と云はれて十兩中に幅を利かしたる當時に髻髻たり、巧者を云へば當時の今泉の方少しく勝りたると思へど出足は確かに今の野州山の方が勝り

たる處あれば中途にして挫折することなくば終には源氏山位るの力士と爲ること難きにあらざるを他日の三役候補者に數へるも賞過にはあらず世間にては此力士を生意氣なり婦人に愛さるゝ爲め出世六ヶ敷からんと評するものあれど其等のことは論ずるに足らず只此力士が人氣と腕前を恃んで稽古に熱心を欠くの一癖は大に戒むべきことにて之か爲めに進歩を妨げらるゝ場合なきにはあらず、中途に挫折せしめざるやう奨励するが肝腎なり、野州山、本名は直井孝市明治十一年十一月を以て栃木縣芳賀郡物部村大字水戸部に生る、今は年寄尾上の尙ほ野州山と呼びし日、其故郷なるを以て伴ひ來りて藤の川と命名し前相撲より取上げしめ後其名を譲つて野州山と呼ばしむ、尾上は一時十兩力士中に名を知られしと雖も終に幕の中に入ることを得ずして廢業したり今の野州山にして幸ひに中途挫折のことなくば恰も出羽の海に於ける常陸山の如く永く出藍の譽を博し得ん、

○大江山松太郎 材幹拔群、身の長五尺七寸、筋骨牢鞏、肩開く腰強く今の検査役尾車が尙ほ大戸平と稱し、幕下たりし當時に比して遜色なし年僅に二十歳を越す、体格成

熱に至らざるの今日にしてに既斯の若き發達あり取口は尙ほ若々しき處あり又無理の仕懸け手多しと雖も是れ却てつ力量の豪健なると氣象の精銳なるを證し其進境の益す多きを思はしめたり今日の地位を見るに太刀山及び駒ヶ嶽と三人鼎立して各々青年力士中の翹々且つ取り口の巧者に五六分を加ふの日に至らば敵方の幕内、中軸以下は恐らくは之れが爲めに風靡さることあらん、大江山、明治十五年十一月を以つて石川縣鳳至郡（能登）島崎村大字志賀浦に生る本名を田村松太郎と呼び幼より草相撲に入りて敵の恐るゝ處となり後大阪に赴き千田川の門に入りて大纏と呼び後に東京に來り井筒嘉治郎（西の海）の門に入て大江山と命名し初めて出場の日より早く好角家の注目する處となり大江山の名は忽ち幕内力士一般に重ぜられたり

○太刀山 太刀山は富山縣婦美郡（越中）西呉羽村大字吉作の人なり本名を老元峰右衛門と云ひ明治十年八月を以て生る家は製茶を以て業となし太刀山亦製茶業に従事し其製する處の茶は曾て博覽會に出品して賞狀を得たることあり、力士たらんとの希望は毫も念頭に置こと無かりしと雖も先年の春に於て相撲巡業の際、年寄友綱の見出す所となり

終に迎へられて力士の群に入り友綱の門下中、海山國見山の二人と並び稱さるゝに至りたり身の長六尺、筋骨張硬、臂力計りがたきものあり、初めて二段目附出し登場敵を破ぶること席の如く終に全勝の榮を得たり其取り口を見るに毫も弱點なく突張るの力と寄り出すの鋭どきは國見山に比して却つて恐るべきの銳氣あり殊に太刀山に一種の恐るべき辣手あり其腰の堅固なると長の高きとを利用し遠くより足を飛ばして無理に敵の足に乗り掛けつゝ力らに任かせて捻ぢ倒ふすの一手なり、先年國見山が稽古の際に足を傷つけられて終に休場するに至りたるも即ち之れが爲めにして此力士にして更らに成熟するに至らば敵方の力士中、能く敵する者は一二人に過ぎざるべく常陸山對太刀山の取組が満都の好角家をして殆んど狂せしむるに至るも近きの中の後にあるべし

○駒ヶ嶽國力 駒ヶ嶽は體軀偉大、筋骨頗る逞ましく太刀山、大江山と相ひ並んで青年力士中の翹楚なり、其取り口頗る堅固にして敵を押へてスツクと立ち上りたる時の壯貌は幕内力士にも多く見ざるの好力士なり常陸山が未だ十兩に入らざる日、既に大關を凌ぐの奇觀ありしと同じく駒も亦早く幕の内を凌ぐの狀あるは誠とに得がたきの力士と云

ふべし、駒ヶ嶽は宮城縣遠田郡涌谷町の人、本名を菊地國力と云ひ井筒門下にして三十一年一月初めて土俵上に登れり

○小緑初太郎 幕下力士中小緑と稱する人氣力士あることは其地位の割合に比して多く人に知られたり、彼は小体なりと雖も氣象頗る鋭く其土俵に上りたる有様は糊の利きし上に針子を張つたる反物の如く常にピン／＼として心地よきこと比ひなし筋肉は然までの發達を見ざるも其割り合ひに比しては多く力量に富み且つ氣合よくして劇しき取口なれば青年力士中に屈指の人氣を博し土俵に出る時は熱心眼に溢れ然も悪びれずして眼の覺めさうなる力士なり、先年高の戸、唐辛等の人氣力士あり小緑或は是等の力士に近からんか、生地は名古屋市元須崎町にして姓を佐藤と云ふ父は同市の相撲年寄三ッ湊と稱し曾つて名古屋力士の大關たりしもの小緑亦幼より相撲を好み草相撲に入りて小湊と稱せしが出京して友綱の門下に入り改めて今の名を稱せり年二十六七歳、幕内力士としては呼び物たる事を得がたからんも之を幕下に置かんには土俵上、一つの花たることを得ん

○有明吾郎 勇氣勃々、敵を碎たかすんば我碎けんとの元氣あるは、有明吾郎の取口なり此力士離れて突張るの専門にして組で技の少なきは残念なり生地は長崎縣南高東郡杉谷村にして明治十一年八月を以て生れ村山初五郎と呼び二十八年六月、伊勢の海門下として土俵に顯はれ累進して今の地位に至れり

○玉椿憲次郎 小兵力士にして体軀殆んど常人に及ばずと雖も其相撲の巧者にして腰強きこと幕下中に於て屈指の呼びものなり一たび敵の躰に取りつくや護模の如く粘り鼠の如く動き反つて冠り擲に抜け、廻つて殘し潜つて渡し強敵と雖とも力を施すの暇なからしむ素より幕の中力士にはあらずと雖も誰に組み合はしても看客を喜ばしむるもの、土俵上に無くてかなはざるの名物力士なり、富山縣中新川郡(越中)砂子坂村に生れ本年甫て十九歳本姓を森野と云ひ十二三歳にして雷の門下に入り湊山と稱し其後玉ヶ關と改め早く好角家の注目する處となる其の体の小にして然も躡捷なる故玉垣の門下玉椿に酷似せるを以て再び改めて玉椿と云ふ

○小真龍大五郎 真龍は今の荒岩の前名なり人は其躡捷にして手取り力士なるを見て蓋

し荒岩門下なるべしと想像するも其實は伊勢の海門下にして荒岩に關係あることなし本名を矢島勝太郎と呼び東京神田の人、其取り口は殆ど玉椿に類似し其体格も亦甚だ相近し小真龍は即ち小真龍にして素より本真龍の荒岩たること難しと雖も二段目中玉椿と共に無かるべからざるの力士、好角家の常に喜んで土俵上に歓迎するの一人なり

力士が初めて序の口に入り若者頭の紹介に依て始めて其名と其人と土俵上に披露する時に當りては斯の如き小男が何故に何の目的を抱ひて力士となりしやと疑はしむるもの多し玉椿、小真龍の如きは即ち其一人なりしと雖も今は二段目力士となつて看客の歓迎する處となれり、獨り玉椿、小真龍のみならず逆鉾、不知火の如きも當初恐くは看客の爲めに斯の如き感を抱かれたるやも知りがたし而して今は斯の如く名力士となれり力士の鑑定も亦難からずや

○立岩蘆太郎 肥満にして強硬、やゝ小錦の舊年に似たるを以て或る人、呼んで小錦の再身と云へり身の丈高からずと雖も梅ヶ谷に比して劣る處なく体量今既に二十七八貫以上あり彼の錦山に比して遜色なく然も取り口は錦山の如く遅鈍ならず順序よく發達せば

番に幕内力士のみならず三役力士たること難きにあらず只小錦の舊時に比して其ほどまでの巧者と元氣なしと雖も到底池中のものにはあらず富山縣礪波郡(越中)柳檜野の人、安賀川由太郎と呼び明治十一年七月を以て生れ三年前同郷人越ヶ嶽の紹介を以て高砂門下に入る

○荒島與會吉 二段目力士に荒島與會吉あり体軀偉大、力頗る強し藤島門下にして田宮與會吉と主ひ明治九年十一月を以て山形縣西村山郡(羽前)谷地大町に生る常に尾車部屋稽古場に行きて大砲、荒岩等の教授を受け他日有望の好力士なり。此力士會て成田不動に養し一七日の斷食を爲して相撲の出世を祈る歸り來れば既に大相撲の開場に逼る人皆危ぶんで其登場を諫止すると頻りなりと雖も荒島奮つて登場し終に四日間の連勝を得たり當人は以て不動の利益と爲すと雖も實は其体の強健なるに依れり然るに其次の場所よりして續いて場所運悪く、花相撲稽古等に於て優に強敵を制するの技倆を以て本場所には常に負け越し多く進歩少し然れども其實力と体格とは好角家の認めて許す處、一旦順境に復せば大に刮目するものあらん

以上は一二人を除くの外は悉の明治十年後出生の青年力士にして逐年好角家をして手の舞ひ足の蹈むを知らざらしめんとするもの序にて二段目力士中常に好角家に歓迎されつゝある人氣力士數人を紹介し置くべし、其人と名は既に世に知らるゝものと雖も其履歴は未だ紹介されざるものなり

○小武藏菊太郎 腰の強きこと當時第一等の力士と稱せられ兩足蟹の如く開くと雖も臂の地に付くことなし、冠り反の名人として常に面白き相撲を取り初切相撲の如きは此力士に若くものなし明治九年東京深川に生れ伊勢崎菊太郎と呼び行司木村瀬平の門下に於て初め鏡野と呼び後今の名に改む

○玉ヶ崎多介 小武藏、岳の越等と体格相伯仲し相撲も亦巧者なり、膚色白くして美、或る人評して横綱の露拂候補者と云ふ、

自から横綱たるに遠しと雖も幕の内力士たることは望み難きにあらず、青森縣中三戸郡(陸中)田子村の人、姓を石井と云ひ始め四ッ浦と呼び高砂門下なり

○金山鶴吉 一目眇し尙ほ能く幕下の鏑々たり彼が一目を失ひしにつぎ一話あり今より

三四年前の年なりし越後地方巡業の際、入浴中に痲毒を双眼に受け其地の醫師に就ひて治療を乞ひしに、醫師二種の藥を與へ之を點じ之を服すれば自づから平癒すべしと云ふ、居ること數日、痛み益す甚だし時の大關小錦之を聞て諭して曰く痲毒は極めて凶惡なり早く東京に歸つて名醫の治を乞ふべしと即ち若干の旅費と一封の書を與へ因幡町の眼科故宮下ドクトルの許に至らしむドクトル一診して嗚呼遅し左眼は既に癩れたり右眼も亦危しと云ふや金山、腰に下たる地方醫師の藥瓶二個を取つて双手に握みエー残念と云ひさませしとくく〜と碎き涕雨の如く洒ぎしかばドクトル深く其意を憐み自から我家に置いて治療を加へ辛く右眼を治し得たりと云ふ金山は大分縣日田郡隈町の人明治元年八月を以て生れ高砂門下なり、始て隈川と云ふ、常に小錦の薰陶を受け眼疾を得て宮下ドクトルの許に在るや、小錦其巡業地より時々我衣服を送り與ふるに其袖中必ず三五圓の紙幣を容れあり小錦が人に對するの慈愛誠に感すべきものありと曾てドクトルの直話をれば筆の因みに記るし置けり

○藤見嶽久助 福島縣岩代國二本松の人、明治十一年六月を以て生れ藤島門下なりと雖

も常に尾車部屋に來り、荒岩等の薰陶を受け居れり始み荒岩の教授を受くるに至り荒岩以て力士たるの望みなしと輕んじたり、然れ共彼が熱心は能く荒岩の取口を學び終に今日あるを致したり

○朝日龍倉吉 相撲に巧者にして注文に富みたり生地は兵庫縣菟原郡御影町にして本年二十七八歳、島倉吉と呼び高砂門下たり

大坂に於ける東京相撲

春 塘

東京の相撲が大坂に於て興行したとて、相撲は相撲で、之を別に變つた觀察をしやうと云ふのは、如何やら無理なやうな話してはあるが、其所が夫浪花の蘆も伊勢の濱菖で、處が變つたら形姿も自然變ずるに違ひない、其の形姿は兎も現任に見聞した處で、大いに異なつた節があるから、之を讀者諸君に紹介しやうと存するのである

▲相撲小屋の構造 廿三間四方で、屋根は段賣を以て被ひ、周圍は板塀である、其の

棧敷出間割俱に代價は疊二疊で、代價の標準を定めるのである、之とても東京とは大いに異なつて居る、先づ興行日に據つて代價に高低があるから可笑い

▲初日の棧敷代 が疊二疊で二圓五十錢であつた、夫から疊登りとなり六日目には、最高價の四圓五十錢とまで騰貴をしたのである、此四圓五十錢の棧敷代は千秋樂まで繼續するのが大阪の習慣ださうだ、夫に東京と違つて相撲茶屋がないから

▲上等の場所と いつたら、島の内の富田屋、扱ては土田、灘萬など云ふ、著名の貨席が其の場所を買切つて、之へ馴染の客を入れるのであるから、普通の看客が一疊買切るやうな事はでき得ない、多く木戸から這入るのであるが、中木戸の際に棧敷方とて法被の背に、己れの名を染抜き之を着て居る男が、二十名程も居て看客を案内するやうになつて居る、其の場代も東京同様に、特別、一等、二等、三等の四級に分つて居るが、之とても

▲日々に代價の變更 を來すのである、仍り棧敷に同じ筆法で、初日より七日迄場代を騰るやうになつて居る、乃て棧敷も土間も東京のやうに、一間毎に掛が切てないか

ら、大入と來たら一疊へ十人程を詰られる勘定であるさうだ、乃て大いに趣きの異なつて居るのは、

▲場所裡の飲食店 東京の大場所にも無ではないが、表面に現れて居ないが大阪と來

たら驚くに外なした、小屋の四隅を飲食店が占領して、之にはまむし(饅頭)すし、料理、

ぜんざい(風汁粉)いる、焼鳥などと記した、看板の挑燈を吊さげて居る、其の飲食店の大

掛りたる事は、花見の掛茶屋に彷彿たるものである、此裡でしるとはなんてあらうと、

局外者には疑が起るに違いないが、飲食店中で

▲しるが一致勢力 を有して居るのだ、しる屋はしる龜と云つて魚肉の味噌汁を賣る

のだが、東京の本場所坊主軍鶏の煎魚を賞翫すのと一般で酒好家はしる龜のしるを吸

なければ、角通のやうに思つて居ない、其の賣揚高も他の飲食店全株と、しる龜一軒と

で、平均が取れると云ふ話してある、其の

▲しるの賣聲 も今は廢たが、一種不思議であつたさうだ、先づ悠う云ふ按排に調子を引

張り「芋の——れ汁あつたかい 旨い——の」と、膳へ汁碗を乗て看客の

中を賣て歩いたのだが余り悠長であるとして遂に止たと云ふ話してある、此外の賣物には随分と妙なものが澤山で、次餅に八ッ橋煎餅を紙捻で束ね一束一錢宛て賣つて居る焼鳥の串差を大井へ盛込で、「上酢や上酢——」と賣つて居るのは、

▲東京の場所 白丁徳利を吊ら提げ、「勝鳥賊に……熱たかいの」と呼びながら

焼鯛を賣つたのと先づ同様なものであらう、夫に料理と來たら辨當の代用品になるの

で、陶器の三組の蓋物へ詰てあるのだ、番鷲ろくより外なしなのは正宗の壘詰賣である

大阪では

▲二合と四合場 のみて、一合場の正宗は賣ない、一鉢に東京より見ると比格上、酒

好家が多いと見え、何處の機敷、土間でも酒を被つて居るのを見受けられたのである、

有繁に喰倒れを自負する大阪者の性根を現し妙に感じられた、飲食の事は爰らとして、

今度は方面を替へて、他の事を言うが、異に思はれたのは

▲土俵に用ゆる水桶 である、大阪流の水桶へ柄杓が附て居て、此柄杓で力士は水を

付けるのだが、幕の内になると東京流の盃(柄のカサ)と改めた、其の水桶は同地の取締

中村芝吉の所有品で、大阪で相撲を興行するには、中村方て水桶を借る事の習慣になつて居る夫から

▲祝義の披露をする のだが、また妙だ、金何圓、何關へ何某さんより下さると、呼出しが目錄包を持って土俵で披露する、之さへ異觀であつたのに、四日目であつたが或る最負客から、太江山へ友禪縮緬の場所蒲團を贈つた、之をまた土俵で披露したのであるが、給金直しまてすると云つた大場所では、恁んな大阪流のチャチを全廢したら好からうと思はれる、が、其の代りに

▲勝力士へ衣類 を脱て、祝義に投てやると云ふやうな俠風は見かけなかつた、之とても土俵へ衣類を投たら、砂に塗れて汚れるのを憂慮するからであらうが、全躰に土地の風俗として外見を衒ふので、祝義を名聞的に利用するに違ひない、夫に勝力士を喝采するにも、

▲常陸山「はん」 梅ヶ谷「はん」と、義太夫のマス調子で寝るのであるが、側から見ると何處となく間が延びて見える、土地最負てはないが東京流は常陸山、梅ヶ谷と語

氣を鋭く褒た方が、相撲らしくつて心地が宜い、總てに寛裕があつて、關東者の眼には齒痒やうに思はれるのである、夫に

▲市中の觸太鼓 は大阪相撲の人足を使役する事になつて居る、東京では太鼓觸れは休業の翌日廻すやうになつて居るが、大阪では左に非ずだ、毎日大太鼓三柄に疣太鼓四柄を四區に分ち、終日市中を觸廻つて歩いて居るのだが、此人足は無給金で祝義が宛たさうである、其の祝儀とても花街の貸席で、僅に白銅一ツ位な散財だから、東京の呼出しは太鼓觸には歩かないで、大阪相撲の人足に一任するのであるさうな、

▲其時の懸賞品は 大阪新報社で猛虎の囀て居る圖の化粧襪一連、また日本生命保險會社で記章の記した化粧襪が四連、之を幕の内、幕下、三段目の全勝力士へ懸賞するので、相撲協會では序の口、序の二段の力士へ糸織の反物四反を出した、すると同地の辯護士連が組織をした、相撲俱樂部で五十圓の懸賞を出したのだから、相撲場は懸賞の陳列場のやうであつた、何は併し相撲の隆盛は思ひやるべしだ、爰に相撲で尤も機敏を要するのは相撲場に於る、

▲勝負附の一義 である、回向院は元より花相撲でも、打出すと俱に木戸前にて勇ましい聲で「相撲——勝負附……」と、云つて帳元根岸の子分が賣つて居る、其の敏捷

なものには敬服せざるを得ずであるが、機として印刷したる過半を損失する事ができる、恚う云と如何やら東京最負のやうてれますが、實際爾うてはちまへんと證明する事があ

る、根岸の方では結相撲(本日千秋)の勝負は豫定して、未だ勝負の定まらない裡に印刷を

始める、恚うして置ないとイザ終てから

▲相撲勝負附を賣る 事ができない、之も豫定通りなら可か、折に觸ては勝負に狂ふ事がある、爾うしたら大變、今まで印刷したる勝負附は損失に歸して了たのであるが、此損失は眼中に描んで看客に満足するやう、算盤の可否を放棄して居るのが、帳元根岸の根岸たる處とも謂つべしである

▲大阪の帳元 則ち 勝負附の版元は劈頭から算盤で割出すものだから、版工部屋の準備が整頓せぬものと見ゆ、東京風に打出すと俱に勝負附と翌日の面觸を、印刷する事が容易でない、之を印刷したら如何であらうと老嬰心に思ふのである、夫に靴の

▲相撲勝負附を賣る のが、頗る異なつて居るのが大阪の見物だ、第一番に相撲が終つても中々に、勝負附を賣得る事ができ得ない、殆ど一時間程も過ぎてから、漸くにして勝負附を賣出すやうになる、して、

▲勝負附を配達 する男の服装が面白い、草鞋を穿ち弓張提燈を提げ、宛然に相場の通信社で各地方へ、打電するため、電信局へ馳するに異ならずだと、云つても宜い位な

もので、印刷する版元配達の方が非常に進歩をして居るやうに思はれる夫は爾うだが大阪興行に對し注意を促さねばならぬ、事がある、夫は場所の便所、則ち

▲小便桶の事で ある、飯櫃形の中に入せと焼印のした、糞桶の露出してあるのは衛生上如何と思はれる、大阪に於る東京相撲の改良に伴はつて爰等の改正までしてほし

い、併し説明も下が、つたから呼出しの拍子木と俱に爰でチョンにする。

相撲協會

春 塘

本所元町に大相撲協會と軒洋燈に記した殿めしい立關構への家がある。此處が則ち東京大相撲組合事務所、昔は其稱を相撲會所と云つたのだが、初代高砂浦五郎の改良に際し、大相撲協會と改めたのである。乃て協會の『人別帳』へ乗つて居る者を、總て協會員と見做してあるから、其中には力士も行司も混つて居れど、習慣として相撲年寄連のみを協會員と思ふのは可笑い。だが年寄其者が協會員の代表者となつて、百般の事務をとる處から、此稱の興るのも無理ではない。夫に協會の正面へ、

▲年寄の役割が張つてある。其席順は

- 取締 高砂 ○検査役 尾車、井筒、武蔵川、友綱、伊勢の海 ○木戸部長 若藤 ○木戸助役 谷
- 木戸 中川、飯花、伊勢ヶ濱、立田山、若松、浦風、入間川、富士ヶ根、二所ヶ淵、立浪、九重、山科、東關、大山、春日山、○
- 大札場 芝甲山 ○棧敷士問部長 伊勢の海 ○棧敷士問 濱風、荒汐、橋、入間川、飯山、立浪、
- 尾車 ○番附出版人 根岸

尾上、鳴月、○札場部長 九重 ○新札場 山分、桐山、淺香山、放駒、清見、音 ○中茶屋藤島 ○寄場 桐山、

玉垣 ○焚出し部長 武隈 ○焚出し 富士ヶ根、式守、松ヶ根、荒汐 ○部屋廻り 川、立田川 ○交渉委員

尾車 ○番附出版人 根岸

て、此年寄に就いて少しく、説明をしたいと思ふ。夫も新舊を對照せねば、趣味もあるまいから、乃て新舊を對照する事にした、

▲目下は取締 と云へど、昔は筆頭と云ふて、其勢力も頗る非常に巾の利たものと見ゆ。二季の勸進元も幕場所の収益のよい時に定まつて居る。當時の専横と云つたら、宛然で、平相國か此條高時のやうな情態で、其比相撲會所の純益は筆頭、筆脇を肥したものである。三代先の玉垣などは幕府の旗下以上の生活であつた。又同じ比の筆頭であつた、雲龍の追手風は頗る贅澤を極め、暑中は屋根船二艘を涼船として、兩國の橋間へ繫がせ置き、夫より晚餐は山谷の八百善と極めて、船を何時も屹度山谷橋へ漕寄せるのであるが、陸地を歩行せずして自用の駕籠を、態々其處まで廻して置いて、夫へ乗つて八百善へ趣くなど、大名のね留守居衆のやうであつたさうだ。此追手風の妻は稻本樓の小

稻と云つた花魁で、夫を數百金投じて根曳きをなし、人も羨む程の全盛であつたが、之等の費用は多く興行の純益金を曝着し、當時不信用なる銀行の重役のやうなものであつた、或年の勘進元に三代前の友綱が當り、非常の大入であつたが、其割に歩金(純益の配當)の取れぬ所から、組頭の大嶽の許へ行つて帳簿を見たいと云ふと大嶽は眉毛を擧めて、一應は尤もだが……私さへ未だ、會所(協會)の帳尻は見た事はないと哄笑した。此一言に友綱も漸念して帳簿を見なかつたと云ふ話した。此悪弊を一洗して會所の役員、即ち當時の協會員を平等にしたのは、故高砂浦五郎の規模であるげな、又

▲検査役八名　と云ふ者が、交代に四本柱に控へて居るが、昔しも仍り筆頭筆脇と、組頭が検査員、夫へ『中改め』と云つて、三役に進んだ力士が、廢業して年寄株となつて、『中改め』と云ふ役を勤め、筆頭、筆脇、と俱に、四本柱へ据りて力士の成績を見る役とする、之が目下の検査役其者であらう。組頭とは

▲今の部長　で木戸に若藤、追手風、棧敷に八角、伊勢の海、都合四名を選抜してある。此下に働いて居る部下の中に、歩持年寄、平年寄の二種あつて、歩持年寄は加入金

百圓を協會へ拂ひ込むと、夫に對する興行毎の利益當配が来る平年寄は加入金も入らぬ代り、利益の配當を受られぬ話してある。が、當時では年寄全躰が歩持年寄となつた處で

▲年寄の階級　は最上等が『取締』之に次くのが『検査役』であつて、『部長』は多く兼勤するものではあるが三級の位置を占め、四級が『木戸』に詰て居る年寄連中で、功勞のある老朽力士、五級が『十間棧敷』廻りて、之より出世をすると木戸へ詰るやうになる、六級が『新札場』木戸の脇の所に通券を賣つて居る係り、七級が『部屋廻り』讀んで文字の如く、力士の部屋々々を調査して歩く相撲道の巡查のやうなもので、八級が『焚出し』其他等外には、『中茶屋』場内設けある、中賣の監督する役であつて、又『寄場』と云ふのがあるが、之は文字が間違つて居るから可笑い、見物場所の紙摺を、賣る所であれば燃場として欲い、『大札場』昔しは筆頭、筆脇と帳元根岸が詰て居て、通券を新札場へ渡す所であつたが、當時では徒な手数を省いたので、大札場は合のみ存して居る位なものだ、『交渉委員』協會の出來事を引受け所、悪く云ば三百的專業である、以上記し

た役員の外に

▲力士と兼業 年寄は、宮城野「鳳凰」、佐野山「朝汐」、錦島「大蛇湯」、久米川「鬼龍山」、出来山「出来山」、秀の山「天津風」、待乳山「舊臘死」、大嶽「大嶽」、甲山「大甲」、其他行司と兼業せしは庄之助「木村庄之助」、瀬平「木村瀬平」、伊之助「長島」、宗四郎「春日野」外に九紋龍が「間垣」を相續したとの話もある、之等の年寄兼業者は、木村庄之助を除て他は、師匠の相續者に限りて歩方利益の配當があるとの事だ、又師弟の關係以外、養子に對しては、歩方利益の配當をせぬ、規約である。

相撲 一 話 一 笑

好 話 子

近比見聞せる相撲滑稽談を配して讀者の一哄に供すべし何れも有りし物語なれど故と人の名だけを除けり

○稽太鼓 大抵の人に稽太鼓は一人にて叩き居るものと心得居り一人にて能くも斯く

賑やかに叩けるものと思へど其實は二人にて叩き居るなり即ち一人が正面よりドゥンカ
くと叩けば一人が側らにてドカくと叩くなり此太鼓を叩くに普通の太鼓を叩く如く
撥の先にて叩く時は遠音の致さるることとして撥の腹にて正面を叩くなれど其のみにては
尙ほ遠音せずとて側らに在りて一人が太鼓の縁を叩き正面よりドゥンカと叩くを側らよ
りドカくと和すなり先年「ナマ徳」と渾名せし太鼓叩は古今の達者にて早曉順風の時は
其音海を渡つて上總の木更津まで聞えたりと云へり、斯て此太鼓の音を昔しより種々に
解釋し各聞く人に依りて正しくも滑稽にも聞ゆるなり「天下太平々々々」と叩くと云
ふものあれば「デンン」と叩くと云ふものあり、否「デフル」と響くなりと云ふもの
のあり天下太平とは相撲を祝したる語、デデンンとは先年まで相撲の興行には損耗のみ
續きしたため、デデフルとは相撲の太鼓が廻れば雨が降ると云ひしより斯云ひ習はせしな
るが我或る時此太鼓打に向ひ貴公等の心には何と云ふ意にて叩くにやと問ひしに彼等は
答へて、其時々心にて叩くなり餘り寒き時は「呑みたい」と一杯呑みたい」と叩き美人
の下を通る時は「ソリヤ來た」と叩き「分つた」と和し互ひに以心傳心に知らせ合

ひ却々天下太平ともドデッンとも叩かず、法華の太鼓を叩くに南無妙法蓮華經と叩くなれど一貫三百ドウデモイと聞ゆるとて、お利口連の中には心の中に實際「一貫三百ドウデモイ」と叩くものありと聞けば我等の櫓太鼓を叩くにも其時々心に浮び目に觸れたるが自然太鼓の音に顯はるゝなりと語りしには覺せず一呷を催ふしたりき

○女將の馬脚 相撲の隆興に従ひ他の藝人社會を始め料理店の主人、待合の女將等に至るまで相撲を見物せずして相撲の話の出来ざる時は客の前に肩身の狭き心地すとして誰も彼も回向院に足を運ぶ中に新橋の某待合の女將も一日客に伴られて襷敷に入り始めて相撲を見しと云ふことは心耻しとや思ひけん種々力士の評判などして坐を濁し居たるが應て土俵入となりて力士等が化粧廻し華麗に並びたるに女將は力士中第一の大男が大砲と知る處より「大砲の前掛(廻の事)は立派なことチー」と云ひしたため襷敷中覺はず失笑したりとなん

○大と小 力士中にも大男の某が或る家に行き大いなるもの、話より小なるもの、話に移りける時、其家の人が小さきもの、標本には斯るものもありとて胡麻一粒に「南無

阿彌陀佛』と書たるを出し示されしかば其力士は之を手に受け見しに天狗の羽團扇の如き掌なれば何時の間にか指の間だより胡麻を下に落し六尺裕の男が天保錢の如き眼して一粒の胡麻を探し立しさまは抱腹せざるものはなかりしと云へり

○幕の内は皆休場 或る人始めて相撲見物に行き歸りて人に語りけるは相撲は盛大なりくと云へど彼やうに休場の力士多くては衰微の基なりと云ふ、何故かと問へば我行きて見物したる時は幕の内力士は土俵入のみにて悉く休場したりと云ふ、其何日目なりしやと問ふに、丁度十日目なりしと答へしは可笑かりき

○新聞の記事 近來の新聞紙には相撲の事と云へば善の顛びしをも記載する甘黨もありて中にも毎場所三日目位に新橋のちしほは未だ顔を出さずと記し然もあしほは必ず入場し居るを知らざる新聞あり二段目とは幕下十枚までを云ひ十一枚よりは三段目なりと思ひ駒ヶ岳は東の三段目幾枚、太刀山は西の三段目幾枚と記したる新聞もあり、櫻矢は最早や四十歳なりと記したる新聞もありさ之等も滑稽の極なり

○名詮自稱 下の力士に羽衣と云ふあり能く敗を取りしかば年寄若藤曰く名が羽衣な

相撲界の隠語

れば体が飛ぶなり早く名を改め来れと。又頭髪の七八分禿したる力士あり初め電気燈と呼ぶ能くも名けたりと思ひしに今は月見山と改名せり同じ禿頭を意味したれど今のは雅味あり誰命名しけん力士社中にも風雅のものありと見えたり

○物を見て情を起す 或る力力の部屋にて朝稽古を了り土俵の土の形の如く盛り上げ上に清めの鹽をより置きたるに一人の下戸なる力士が此邊には牡丹餅屋は無さやと問ふに、何故ぞと反問せしに土俵の土を盛り上げて鹽をよりたる形の如何も牡丹餅も似たれば覺えず食思動きたりと答へしに一同失笑したりき

春

塘

無邪氣な相撲社會にも隠語があつて、仕度部屋なぞでは仲間同士で遣つて居る、他の人とは趣きが變つて居て、可笑からうと思ふから茲へ掲げる事にした、

▲惠比壽講 充分に食事をする事、又飯を食ふ時にも用ゆる。

▲關子を下す 萬事輕蔑して下目に人を見る事。

▲丁場負け 世辭が宜くつて挨拶の出來ぬ事、又單に丁場と云ふのは世辭の事。

▲目鏡した 覗いた時に云ふ語だが、總て覗く事を目鏡と云ふ。

▲ね天氣 錢の無い奴の事。

▲さしや 無一物で錢を遣ふ話しをする手合を指して云ふ。

▲日下山を極る 立花のやうな脊高の力士で、寐ると蒲團から足が出る所で、勘定が不足で足を出すのを、斯云ひ始めた。

▲ね米 小遣錢の事を云ふ、力士の給金三兩にならぬ前は、ね米とて親方より小遣錢を出から、三兩以下をち米相撲と云ふさうだ。

▲ハアちゃん 白痴の通稱となつたが、昔し中立庄太郎と云ふ親方の娘で、別嬪であつたが白痴だから、乃でハアちゃんとなつた、女を捉へて冷評のである。

▲ヤシマン 水の勝た酒を云ふ、意味は香具師の萬金丹で服ても効ぬと云のを縮めたものだ。

▲ヤシマン 水の勝た酒を云ふ、意味は香具師の萬金丹で服ても効ぬと云のを縮めたものだ。

▲仙臺道百兩 と云へば十兩の事であつて、總ての十倍又は駄法螺を吹くを、仙臺道かと問返すのが習慣になつて居る、此仔細と云つたら昔仙臺道は六丁一里、十里歩いて六十町であつたから起つた語だ。

▲堅くなる 塙遅れのする事。

▲たにまら 勝負客を捉へて、散財させる事を云ふ。

▲石炭を焚け 非常に急ぐ事であるが、花相撲なぞで雨でも降り出し相撲を取進せるに此語を用ゆる。

其他少しく野卑だが、力士の骨牌合せに用ゆる語がある。

▲渡し場骨牌 錢なし連中で、勘定の都度に「乗つたく」云ふから、此稱が起つた之に對する

▲ナル骨牌 渡し場と同じく、錢を出さずに之で何程にナルと、計算するからで、又瞞着手段に

▲毛谷村三本 目下の大嶽門左衛門は至つて瞞着手段で、塙にある札を曳いて來て、

何時も三本と瞞着すから、不正をする奴を毛谷村三本、乃て失策の事を

▲君山ざらし 今は荒磯と云ふ年寄だが、眼が悪つて何時も晒を見違ひ、札を下して損をするから、見違ひる事を斯道では、君山ざらしと云ふさうな、

▲烏賊のくそ 賭博で勝逃をする者を、烏賊のくそと云ふが、烏賊は海中で餌を食つて逃る時、くろの墨を吹くから、夫に做つたもの。

▲備後尾の道 寺が多ひ所である、乃て賭博の寺錢の多い事を、斯く云ふのであると云ふ。

角 力 雜 観

兩 國 河 邊 黒 人

力士の批評と角場の觀察と云ふもの近來の新聞雜誌上には欠くべからざるものゝやうになつたが實は此批評と觀察と云ふものが六ヶ敷やうて容易のである、回向院へ二三回も足を運んだ新角池は皆之をやつて居る、只其批評が見當違ひなのと其觀察が横づツぼら

な計りてある、今のやうに操觚者が大膽の世の中では批評と觀察は誰にても書けるが、六ヶ敷のは力士の逸聞と斯道の内容である、是は回向院へ五年や六年足を運んだ丈では筆を下すことが出来ぬ少なくとも十年以上相撲茶屋の差入ものを食ひ五六千圓以上も遣つて見なくては分つたやうでも分らぬ處がある、未だ夫計りては行かぬ、相撲年寄が何處でもお辭儀をし、關取りに脊中を洗はせるまでに面を賣ぬ中は通のつもりでも通ぜぬ處がある僕は兎角皮肉を云たいのが癖で今度も二三ヶ條憎まれ口を言て見やうと思ふ、何ら流行の相撲だと云つても譽めて計り居られぬからである

○書生の見物少なき事 力士社會で自惚て言ふのを聞けば角力は尙武の具であるのに書生社會の觀物人が少ないのは遺憾である是は書生が柔弱のゆゑであらうと批難して居る之を或る新聞で布行して今の書生社會は女義太夫の後を追ふて醜體極つた所業を爲て居ながら尙武の一端とも云ふべき角力を觀物するものゝ少ないのは怪しからぬことである、今日の如く角力場は日々客止の大入りであるのに書生の客と云つては十分一にも足らない何か女義太夫の後を追を止めて角力でも見るやうに爲つてもらひたいと論じたの

がある、成ほど書生の客の少ないのは事實である、女義太夫の後を追ふのは止てもらひたいには相違ないが、角力の觀物に書生の少ないのは獨り書生の罪ではない、其實は角力の方が悪いのである、元來角力と云ふものは一日位見ても然ほど面白味を感じるものではない角力の眞味を知るには十日間を十日間とまでは行かずとも十日の相撲は五日以上見る覺悟で二季とも順次に見て行かぬ時は力士の變遷、長所短所が分らぬのである、變遷と長短を知らぬ目で角力を見ても世間で騒ぐ程に面白味の感ぜらるゝものではない、然るに近來角力の大入りに附上りて年々棧敷木戸錢等の價上げをして安いことでは角力を見られなくなつた數年前までは木戸が十錢、棧敷が四五十錢であつたから一圓以内で一日見ることが出来たのであるが段々價上げて今では木戸が二十錢棧敷が一圓位となり一日見るには儉約しても二圓はかゝることゝなつた角力は芝居より安いので受の好かつたのが今では歌舞伎座を見るのと殆んど同價となつて來た、ソレに芝居は一日見れば其芝居だけは澤山であるが角力は其を五日も十日も重ねなくては味ひが生ぜぬのである、月額の設定つた書生の親元仕送金では到底切り込むことの出来ぬのである、縱令や

切り込んで見た處が毎場所の兵糧連はも續かぬのである、是が書生客の少なき大原因で、其上に紳士とか紳商とか云ふ連中が大抵好い機敷は占領して仕舞ひ其餘波で動もすれば悪い機敷も少ないことがある夫を強て入場せんとすれば茶屋や機敷賣に格別の手當をせねばならぬのである、夫であるから角力の方でも眞實に書生を歓迎する了見があらば、然るべき學校の徽章又は相當の證據あるものには特別に安く見らるゝ方法でも設けて置かぬ時は角力は益す書生と遠ざかる計りである、之は書生の肩を持つてはない角士の胸を鳴すのである

○大慾か無慾か 大相撲十日間の總入費が凡ろ何程かと云ふに二萬圓内外に過ぎぬであらう芝居ならば團十郎と菊五郎兩人が十日間の給金位のものであらう、ソレダカラ芝居は損計りして居るに角力は何時も一萬五千圓以上の純益がある、此は大さう角力の方が利口であるが其純益は何なるかと云ふに忽ち分ち取りにして仕舞て此盛大の極に居て相撲協會には借金はあるとも餘財は少しもないのである、ダカラ或る時協會員に向つて、今の中に少しは用意したら好からう東京も追々地所が乏しくなるから早く適當の地

を尋ね協會専有の興行地を買ひ求めてもしたら永世までも基礎が立つたらうと注意したら其答へが斯だ、角力は一二代限であるから、後のことを言ても多くの年寄どもが相談に上らぬに困る、何でも其時々々の利益を分け取りにせなくては承知せぬと云ふ連中が多いのであるから到底基本金などを溜ることが出来ぬ、協會員中にて心あるものは基本の事を思はぬてはないが多数に無數到底其説が行はれぬのである、實は何時までも此盛つて計りは居ぬとは思はぬのではないが、と此答へは一應最もではあるが一方には限りなく價あげをして一方には一文も残さず散して仕舞、所謂宵越の錢は持ぬと云ふ大慾か無慾か理屈の分らぬ連中である

○力士の不熱心 何事も敵愾心がなくては劇しく行かぬ昔しは西と東がチャンと分れて居て力士の重なるものは諸侯の抱へとなつて居たから本場所の勝負と云つたら殆んど命がけて立合ひには火の出るやうであつたが今日では諸侯の抱がなくなつて然なきだに張り合ひの薄らひだる上に東西の合併興行が續き敵も味方も差別の無くなつたのみならず互ひに其取り口を吞込んで居るので大相撲でも少しも敵愾心と云ふものが顯はれぬ、ソ

レに士俵へ出ても熱心の色が薄く力士の心得と云ふものがない四股を踏むにも只形計りて少しも力が入ることなく立ち合ひにもベテラン立ちなど云ふことが流行し、真との心得あるものが少い今の力士中にて立合ひに熱心の見ゆるは逆鋒を第一として荒岩、梅ヶ谷、常陸山、下つて小緑などは稍見るべきものであるが、其他は多くは輕卒にあらざれば狡猾で持ち切居る、中には大砲の如く自然大様にして輕卒狡猾と云ふべからざるものもあるが、先代式守蝸牛の言に「四股を踏むは氣を臍下に納めて心身動かざるがため、之に依て氣は銳にして利劍の如し」と云ひ又「立合の意は本來無一物なり、野心ある時は中に虚處を生ず」と云ひ又「力強しと雖も氣柔かにして力を殘し外弱く見ゆれども内剛にして大丈夫なるを要す」と云ひ又「忍びは表を柔かにして内剛なるの所以、相撲道の第一義なり云々」と云つてある今の力士の中で斯る心得あるものは殆んど一人も得がたいと云つて好からう、昔は姑く置いて近き頃も故の高砂とか朝日嶽とか云ふものは能き心懸けがあつて月夜に表に出て四股を踏むことを習つたことがあつたさうだ是れは單に力を練るの爲めのみでなく其影の地上に照らされて其様の悪しきか好きかを試して其悪し

きは改め好きは練熟することを力めたのである、今の力士は四股を踏むことなどは餘計のことこの如く心得、立合ひにも体をコセツカセたり、先さへ出たり、手鼻をかんだり、ソレハく見悪い様計りするのである、フツかり合ふ計りが稽古ではない、少しは心を練り体を定めることも稽古するやうに心がけさせたいものと思ふのである

○相撲茶屋の利益 先年相撲の衰微した時には興行毎に損害が重つて歩持年寄中に利益の配當なきは勿論、却て損害の分擔金を徴發さるゝことが屢ばであつた之が爲に相撲年寄は殆ど衣食住にも差支る計であつたが相撲茶屋は此時にても相應の收利があつて餘り困らずに暮して居たのであるから相撲年寄は常に「力士仲間には粥も喰れぬのに茶屋は猫までも刺身を食て居る」と歎息して居つた位であるから昨今の相撲茶屋の利益は中々莫大のことである、機敷の儲けや飲食物だけでは然したる事もあるまいが茶代と稱するものが大きいのである、二三十圓は下等の分て五六十圓が中等、その上等のものは百圓にも上る、是が十日間一間買ひ切りの茶代である、是でなくては好い機敷か取れぬからであつて、茶屋が貪ぼる計りてなく客の方からせり上たのではあるが、此分ては追々

茶屋が増長して力士は上等社會に占領され、平民的見物は益す虐待されて双眼鏡で見なくては力士の顔も別らぬ隅の遠き處へ追込まれて仕舞であらふ、芝居の方でも芝居を見る金と茶屋の茶代が匹敵して終には客足にも影響した處から昨今では茶代廢止説などが起て居るやうだが、相撲も今に此問題が始まつて來るに相違ない、茶屋の方では呉るものは頂だいて置くが當然だが相撲協會の方で早く注意を加へて看物の便を計るが畢竟は自分等の利益である、幸ひに今では相撲仲間でも刺身を食ふ餘裕が出來たのであるが茶屋の方では西洋料理も會席料理も食つて、ソレで財産を作つて居る、是だから第一に馬鹿にされて居るが客で次が相撲仲間以利口なのは獨り茶屋計である

○力士と年寄 數年前までは年寄の権力が強くて力士は其下に屈伏して居たのであるが、昨今では全く反對して力士の権力が年寄を遙かに凌いで居る、最も二段目以下で餘り評判もない力士は矢張り親方々々と恐れて居るが幕の中は勿論、幕下でも多少人氣のある力士の権力には親方でも頭が上らぬ、成る程一人の人氣力士で何千人の看物を呼ぶと云ふ取組もあるから、力士の威張るが當然でもあらふが、之がために動すれば力士が苦

情を起して無理でも通さうと考へ、肝腎の日に休場したり、假病を使つたり、脱走を企だてたりつまりは客の興を妨たげることとなる、土俵上の勝負にも分り切た敗に物言をつけて預かりとしたり、待た待ぬの苦情が始まつたり、屢は不体裁を演ずることがある、此分では今に検査役も何もいらぬこととなる、今にはない既に検査役の有無を感じない位となつて居る、力士が役者であるから無理に之を壓制するには及ばぬが今の中に憲法でも作つて、せめては土俵上の失体だけでも防ぐことに致したらばよからう。

○行司の陶汰 新聞や雑誌で力士のことは八ヶ間敷云ふが行司のことは少しも書ぬから相撲の方でも之を度外にして其行なり放題に任かせてある、舊は行司が即ち相撲長で検査役を兼たやうなものであつて勝負は行司の左右に任せ、力士は苦情の云へぬものであつた、立合ひに「待た」の無い時代は、行司の引た團扇で何でも彼でも立たたのである谷風、小野川の將軍御覽の相撲にも小野川が不覺の「待た」をやつたのを行司が「氣負」と云つて谷風に團扇を上たまひ、苦情も起らぬ程であつた、然るに今の行司は有て無きが如して誰にも分る勝負は裁判が出来るが少し怪しい勝負には口出しの出來ぬのが多いので

ある、此際行司の権限も定めて遣り、其代りに下らぬ行司はツン／＼陶汰して仕舞が宜しいのである、我見る處では今の行司中、木村瀬平は先第一等で体度の工合と總ての取り廻しが他の行司の摸範である、只音聲の甲走たのが耳ざはりである、此男は元は美音の響があつたさうだが今では齒の抜けた爲めに無理の聲を遣ふ悲しさは斯は甲走つて耳にさはるのであるさうだが惜い事だ、木村庄之助は口上は瀬平よりも上手だ、勿論美音ではない寧ろ胸間聲に近いが、何處かに位があつて大い様に思はれる、腹も瀬平より太いのであらう、瀬平の方は狭である、庄之助の方は地歩を占めて居る、其代りに土俵へ出ては少しも働らけぬ、人も知る通りのヨイ／＼であるから、之は土俵へ出すのが、無理だ、ソコで口上は庄之助、土俵は瀬平を使つて次が式守伊之助である、是は伊之助を襲だ當時は見られなかつたが今日では大いに位るづいた、庄之助、瀬平には未だ／＼遠く並べぬが棄たものではない次は本村進である、之は大坂から來たので未だ人氣がないが中々シツカリして居る。次ぎに庄三郎、錦太夫、勘太夫、與太夫などは熱心家て追々上達して行くから今に立派のものになるだらうが、庄九郎、庄太郎、朝之助などは陶汰

すべき連中である、藤次郎は土俵の働き勝負の見分については、上等の部であるが聲の胸間なので引立たない一學に宗四郎は可もなく不可もないの部であつて其外は未だ芽生へて可否の評にかゝらぬのであるから、姑らく前途の容子を見て遣べしだ、兎に角力士計りては相撲が引立たぬ、相撲仲間も好角家も新聞雑誌などでも行司の方面へも少しは注意をしてやるがよやい

三十五年間番附

番附の創めて世に出でたるは今より追考すべからず蓋し相撲を以て専門とせしものありしの中に其一派の席順等を記して相撲場に掲げたるは勿論なるべければ之を番附と云ひ得べくんば足利時代既に其事ありしは追想するに餘りあり然ども之を彫刻印刷して世に廣佈せしは徳川後勸進相撲の盛んに行なはれしの中の事なることも明らかなり而して其印刷番附の今に存在したるもの凡そ百數葉と雖も浩瀚にして到底翻刻に堪ざるを以て姑らく明治初年以後の幕内及び幕下十枚だけを記載す

附 番 撲 相

前頭	前前前前前前前小關大	同同同同同同同同前	前前
頭	頭頭頭頭頭頭結脇關		頭頭
幕	投清小四勝小大若浦境方	東明	投清
の	見野海の	治	見
川	石瀉崎波浦柳纏島風川	十	石瀉
下	勝佐鬼荒手武鯨梅朝雷方	年	下
長	野面 柄藏のケ日	五	勝鬼
山	山山山虎山瀉海谷嶽電	月	山山

同同同同前	前前前前前前前小關大	同同同同同同同同	
頭	頭頭頭頭頭頭結脇關		
稻取	上藤投清四勝大浦若境	東同	
瀨	の 見海の	方	
川	沙川石瀉波浦纏風島川	年	
下	神稻佐鬼荒手武鯨梅朝	十	
高	野面 柄藏のケ日	二	
千	崎川山山虎山瀉海谷嶽	月	
穂	川山山虎山瀉海谷嶽	西	

同同同同同同同前	前前前前前前前小關大	同同同同同同同同	
頭	頭頭頭頭頭頭結脇關		
藤勢	藤上藤清四手勝浦若境	東明	
朝	田ケの 見海柄の	方	
千	川沙川瀉波山浦風島川	治	
出	川沙川瀉波山浦風島川	十	
白	川沙川瀉波山浦風島川	二	
浦	川沙川瀉波山浦風島川	年	
荒	川沙川瀉波山浦風島川	西	
幕	川沙川瀉波山浦風島川	五	
藤	川沙川瀉波山浦風島川	月	
出	川沙川瀉波山浦風島川	阿	
荒	川沙川瀉波山浦風島川	方	
幕	川沙川瀉波山浦風島川	月	
藤	川沙川瀉波山浦風島川	大	
出	川沙川瀉波山浦風島川	茅	
荒	川沙川瀉波山浦風島川	忍	
幕	川沙川瀉波山浦風島川	佐	
藤	川沙川瀉波山浦風島川	柄	
出	川沙川瀉波山浦風島川	倉	
荒	川沙川瀉波山浦風島川	の	
幕	川沙川瀉波山浦風島川	田	
藤	川沙川瀉波山浦風島川	倉	
出	川沙川瀉波山浦風島川	の	
荒	川沙川瀉波山浦風島川	川	
幕	川沙川瀉波山浦風島川	川	
藤	川沙川瀉波山浦風島川	川	
出	川沙川瀉波山浦風島川	平	

觀 大 撲 相

關大	同同同同同同同同前	前前前前前前前小關大	東
脇關		頭頭頭頭頭頭結脇關	境方
東	同	幕	幕
雷	島上藤邊山關荒松小投幕	勝驚荒手若勝四佐大雷境方	野
境	田ケのケ 釋 野	ケ 柄 の海野	
方	十二月		
電	川沙川瀉波山浦風島川	山濱虎山島浦波山纏電川	西
川	西	下	方
朝	境長甲藤神大稻大武藤	鬼清鬼梅武磐浦小鯨朝綾方	
綾	田 見 の	面見ケケ藏 の日瀨	
方	野山岩川崎崎川港崎月	山瀉崎谷瀉石風柳海嶽川	
日			
瀨			
嶽			
川			

前前小關大	同同同同同同同同前	前前前前前前前小	
頭頭結脇關		頭頭頭頭頭頭結	
東	同	幕	
東	島上藤邊山關荒松小投幕	投驚清手勝若四浦大	
明	田ケのケ 釋 野	ケ見柄の 海	
治	年		
方	十二月		
若	川沙川瀉波山浦風島川	石濱瀉山浦島浪風纏	
浦	西	下	
大	白八境長藤大神稻大藤	勝鬼鬼荒梅武佐小鯨	
雷	雲 田見 の	ケ面 ケ藏野 の	
境	山瀉野山川崎崎川港月	山崎山虎谷瀉山柳海	
方			
治			
年			
十			
二			
月			

前前前前前前前小關大	同同同同同同同同前	前前前前前前前	
頭頭頭頭頭頭結脇關		頭頭頭頭頭頭	
東	同	幕	
東	島上藤邊山關荒松小投幕	投小清手勝四	
明	田ケのケ 釋 野	野見柄の海	
治	年		
方	十二月		
小	川沙川瀉波山浦風島川	石崎瀉山浦波	
勝	西	下	
四	柄佐白境長藤大神稻大大	勝驚鬼荒佐武	
小	の倉 ケ 見	ケ面 野藏	
若	平川境野關山崎川港崎	山濱山虎山瀉	
大			
浦			
境			
方			
年			
十			
二			
月			

(九四四)

附 番 撲 相

同	同	同	同	同	同	同	同	前	前	前	前	前	前	前	前	前	小	關	大	
頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	結	脇	關
伊	大	音	勢	忍	中	干	常	幕	島	稻	入	清	勝	荒	藤	浦	響	手	若	境
勢	田	羽	津	勝	陸	田	間	見	の	田	柄	川	川	瀉	浦	角	川	風	矢	山
浪	野	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下
小	荒	和	九	龍	片	長	高	達	井	司	千	藤	荒	大	鯨	武	阿	梅	梅	梅
武	の	田	の	紋	ケ	男	千	ケ	の	天	羽	の	の	藏	武	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ
藏	玉	花	野	森	龍	鼻	浪	山	穗	關	筒	平	龍	嶽	川	虎	纏	海	瀉	谷

同	同	同	同	同	同	同	同	前	前	前	前	前	前	前	前	前	小	關	大	
頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	結	脇	關
伊	大	音	武	立	中	浦	勢	干	常	幕	島	入	高	上	浦	勝	柏	關	響	荒
勢	田	羽	藏	田	津	勝	陸	田	間	千	ケ	の	の	の	柄	川	川	穗	汐	風
浪	野	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下
一	稻	小	和	荒	片	九	龍	長	井	達	稻	千	大	清	荒	朝	司	阿	武	梅
木	の	武	の	男	紋	ケ	ケ	羽	見	の	天	武	藏	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ
松	花	藏	森	玉	波	龍	川	鼻	山	筒	關	川	嶽	纏	瀉	角	平	龍	松	瀉

同	同	同	同	同	同	同	同	前	前	前	前	前	前	前	前	前	小	關	大	
頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	結	脇	關
伊	小	伊	音	中	立	浦	千	常	幕	島	入	高	上	勝	浦	柏	關	響	荒	手
勢	の	の	羽	津	勝	陸	田	間	千	ケ	の	の	の	柄	川	川	穗	汐	浦	風
越	川	川	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下
大	小	和	片	和	龍	九	忍	長	荒	達	稻	千	大	清	荒	阿	清	朝	司	武
和	武	の	男	の	紋	ケ	ケ	羽	見	の	天	武	藏	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ
錦	藏	達	森	波	花	鼻	龍	川	山	玉	關	川	嶽	纏	瀉	角	平	龍	松	瀉

觀 大 撲 相

(八四四)

同	同	同	同	同	同	同	同	前	前	前	前	前	前	前	前	前	小	關	大	
頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	結	脇	關
五	常	武	中	忍	出	千	白	浦	荒	勢	幕	稻	藤	四	上	藤	勝	浦	手	若
月	盛	津	津	勝	勝	勝	勝	勝	勝	勝	勝	勝	勝	勝	勝	勝	勝	勝	勝	勝
所	山	野	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下
砂	和	龍	佐	朝	長	柄	島	大	高	鬼	達	稻	響	非	荒	千	大	鯨	武	梅
改	田	防	ケ	倉	見	の	田	千	面	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ
組	の	の	の	の	の	の	の	の	山	關	川	矢	筒	虎	嶽	纏	海	瀉	谷	谷
加	森	森	象	川	洋	山	平	川	湊	山	關	川	矢	筒	虎	嶽	纏	海	瀉	谷

同	同	同	同	同	同	同	同	前	前	前	前	前	前	前	前	前	小	關	大	
頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	結	脇	關
荒	嶽	九	常	中	武	浦	忍	山	勢	朝	幕	入	荒	井	藤	清	四	響	手	勝
の	紋	津	津	勝	陸	田	間	千	ケ	の	の	の	柄	川	川	穗	汐	風	浦	矢
玉	越	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下
一	和	司	龍	千	大	柄	島	高	長	鬼	稻	達	藤	上	荒	千	大	鯨	浦	若
の	防	天	ケ	勝	の	田	千	面	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ
取	森	森	龍	象	川	洋	山	平	川	湊	山	關	川	矢	筒	虎	嶽	纏	海	瀉

同	同	同	同	同	同	同	同	前	前	前	前	前	前	前	前	前	小	關	大	
頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	結	脇	關
同	常	常	忍	浦	中	勢	龍	島	千	柄	幕	入	稻	清	藤	荒	勝	浦	手	武
年	陸	陸	津	ケ	田	勝	の	の	の	の	の	間	見	田	の	柄	藏	武	藏	武
五	川	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
月	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下	下
竹	和	音	武	九	長	片	司	高	達	井	荒	千	上	藤	大	浦	鯨	若	梅	梅
の	田	の	羽	紋	男	天	千	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ
林	花	森	山	野	龍	山	浪	龍	玉	關	川	嶽	纏	瀉	角	平	龍	松	瀉	谷

入し附録會附を出す
明治十二年六月
西方
備考 此年十二月は休業し直ちに翌年一月興行に移る

前頭	小結	關脇	大關	同	同	同	同	同	同	同	同	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭			
東明	東明	東明	東明	菊	菅	浦	長	千	島	入	荒	逆	波	幕	龍	若	立	柏	關	出	上	高	千
手	柄	山	浦	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ
山	山	門	高	濱	川	湊	山	森	川	川	飛	關	音	下	鼻	山	野	戸	戸	山	沙	穂	嶽
見	の	風	山	岩	綾	音	中	若	和	出	忍	勢	伊	下	一	稻	勝	井	常	清	大	高	浦
の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
山	海	山	山	音	里	浜	山	山	川	森	山	川	濱	下	矢	花	浦	筒	山	瀉	達	山	風

前頭	前頭	小結	關脇	大關	同	同	同	同	同	同	同	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭			
東同	東同	東同	東同	芝	鷺	登	音	島	長	浦	入	荒	龍	幕	友	柏	關	廣	上	緋	千	高	鞆
手	柄	山	平	田	ヶ	田	羽	田	間	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	の	の	の	の	の	の	の	の	の
山	平	山	門	山	濱	川	山	川	山	湊	川	飛	鼻	下	網	戸	戸	海	汐	緋	嶽	穂	平
高	緋	大	西	大	増	綾	和	逆	千	忍	九	中	出	下	伊	勢	井	稻	一	常	清	大	武
見	の	の	の	野	位	の	ヶ	勝	紋	津	迦	迦	下	下	の	の	の	の	の	の	の	の	の
山	緋	達	海	川	山	浜	森	關	森	川	龍	山	山	下	濱	イ	筒	花	矢	山	瀉	達	瀉

前頭	小結	關脇	大關	同	同	同	同	同	同	同	同	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭			
東明	東明	東明	東明	風	荒	音	島	九	増	逆	中	浦	伊	幕	關	勢	荒	清	常	上	友	柏	高
手	柄	山	平	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	の	の	の	の	の	の	の	の	の
平	山	門	高	山	石	山	川	龍	山	關	山	湊	濱	下	戸	イ	飛	瀉	山	汐	網	戸	穂
千	高	高	西	芝	八	登	千	長	和	入	桐	鷺	立	下	稻	廣	井	出	海	一	武	千	浦
羽	千	見	の	田	橋	田	勝	の	間	ヶ	田	ヶ	田	下	の	の	の	の	の	の	の	の	の
嶽	穂	山	海	川	山	川	森	山	森	川	山	濱	川	下	花	海	筒	山	山	矢	瀉	嶽	風

大關	同	同	同	同	同	同	同	同	同	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	小關	大關	關脇						
東明	東明	東明	東明	伊	中	島	音	長	千	浦	立	勢	入	幕	西	達	常	浦	勝	出	荒	緋	千	武	大	楯	手
若	方	治	伊	勢	津	田	羽	勝	田	間	の	ヶ	陸	の	來	の	羽	藏	鳴	の	藏	鳴	の	藏	鳴	の	藏
島	西	一	年	濱	山	川	山	山	森	湊	野	川	下	下	海	關	山	風	浦	山	虎	緋	嶽	嶽	瀉	門	山
梅	方	月	日	若	荒	和	忍	小	九	龍	稻	島	下	下	井	稻	大	桐	高	關	上	清	高	鞆	梅	の	ケ
ヶ	下	田	の	武	紋	ヶ	の	田	の	の	の	の	の	の	千	の	ヶ	見	見	の	の	の	の	の	の	の	の
谷	山	山	飛	山	森	川	載	龍	鼻	花	川	下	下	筒	川	達	山	穂	戸	沙	瀉	山	平	谷	の	ケ	

小關	大關	同	同	同	同	同	同	同	同	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	小關	大關	關脇				
東明	東明	東明	東明	泉	伊	登	音	和	忍	浦	稻	立	勢	幕	島	入	高	勝	上	浦	柏	關	荒	武	手
大	鞆	梅	方	勢	田	羽	田	の	の	の	の	の	の	の	田	間	千	の	ヶ	の	の	の	の	の	の
門	平	谷	年	瀧	濱	川	山	森	川	湊	花	野	下	下	川	川	穂	浦	沙	風	戸	戸	虎	瀉	山
手	武	楯	方	大	若	小	九	片	龍	千	大	長	常	下	井	達	稻	出	緋	清	桐	千	鞆	高	司
柄	藏	山	山	和	武	紋	男	ヶ	勝	陸	陸	陸	下	下	ヶ	來	見	羽	の	見	天	の	見	天	龍
山	瀉	山	山	錦	山	藏	龍	波	鼻	森	達	山	山	下	筒	關	川	山	緋	瀉	山	嶽	平	山	龍

前頭	小結	關脇	大關	客	同	同	同	同	同	同	同	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭					
東同	東同	東同	東同	筧	登	濱	長	音	千	浦	若	入	荒	龍	幕	達	立	出	高	柏	上	緋	千	關	
手	柄	山	平	田	の	羽	勝	間	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ	ヶ
平	山	門	高	川	音	山	山	森	湊	山	川	飛	鼻	下	關	野	山	穂	戸	沙	緋	嶽	嶽	戸	
武	西	手	楯	中	出	和	小	伊	忍	若	九	島	勢	下	稻	勝	井	常	西	清	浦	高	大	大	
藏	の	柄	山	津	釋	田	武	勢	の	紋	田	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
瀉	海	山	山	川	山	森	藏	濱	川	川	龍	川	下	下	花	浦	筒	山	海	瀉	風	山	達	達	

明治三十六年一月十日印
明治三十六年一月十三日發行
明治三十六年四月廿八日再版發行

定價金參拾八錢

著作權
所有



編述者

三木貞一

編述者

山田伊之助

編述者

大橋新太郎

編述者

白土幸力

編述者

三光堂

發兌元

東京市日本橋區
本町三丁目

博文館

東京市日本橋區本町三丁目八番地
東京市神田區美土代町三丁目一番地
東京市神田區美土代町三丁目一番地

上司子介君編 (第六版)

相撲新書

全壹冊 洋裝 袖珍 美本
正價貳拾五錢 郵稅四錢

好力士輩出して相撲の盛を極る今日の如き相撲を知らざる者の案内となり、兼て「春の夜はあらず、本書は「相撲通の参考」となり、相撲の歴史、相撲の組織を始めて、力士の生活、力士の養成法、力士の依田、河竹、河尻等諸家の劇に關する意見を紹介し、芝居の部は、劇評諸家訪問録に坪内、千葉、を始め、梨園の逸話を遺もなく網羅したり、蓋し好角家たる、好劇家たるを問はず、必ず一書を座右に備ふべき好著なるべし。

上子介君、山岸荷葉君合著 (再版)

相撲と芝居

全壹冊 洋裝 菊判
正價貳拾五錢 郵稅六錢

最も弘く世に喜ばる、二つの遊技を頗る面白く書き綴りて、一冊に收めたるもの。相撲の部は、相撲の趣味、相撲協會の組織を始め、力士の生活、力士の養成法、力士の依田、河竹、河尻等諸家の劇に關する意見を紹介し、芝居の部は、劇評諸家訪問録に坪内、千葉、を始め、梨園の逸話を遺もなく網羅したり、蓋し好角家たる、好劇家たるを問はず、必ず一書を座右に備ふべき好著なるべし。

集全碁圍

第壹編 碁圍入門

(第七版)

本書は第一に手段の何物たるを知らしめんが爲め術語と對照して最要なる手段を説明し次て其問題(詰碁)を設けて練習に供したり之れ入門の捷徑順序たるを以てなり。

故小林鉄次郎氏肯像入
正價金拾五錢 郵稅四錢

第參編 碁圍定石

(第三版)

定石を圍むことを得るに至れば最早其本道に歩を進めたるものなりされども邪路に踏入り其正式を誤るもの多し宛に角此時の注意は斯道の大切時期たり本編詳に其法規を示して最も懇切を極む

正價金拾五錢 郵稅四錢

第貳編 碁圍初歩

(第四版)

是より順次本論に入れり前編には極めて卑近なる術語を示すのみにて未だ全般に既及ぼさず因りて今較や高尙なる術語を解釋して首尾全からしめんことを期せり總論には其技の心得を附せり

正價金拾五錢 郵稅四錢

第肆編 碁圍詰方

(既刊)

戦術と布陣法とは車の兩輪鳥の兩翼の如し此二者完備して始めて碁に巧なるものといふべし而して此二者中初學は先づ戦術即ち詰方を修練すべきなり。本編初學者の爲に其捷徑を示さん爲め生死斷續等の要道を説明せり。

正價金拾五錢 郵稅四錢

第五編 圍碁布石法 第七編 互先定石集

（刊 既）

本編には非目、六目、四目、互先の布石法を懸示せり而して八目、七目、五目等は大同小異たるを以て之を略せり互先の石立は碁客の重視する所なるを以て編者特に深く注意し前半は古風の精を摘み後半は今代の粹を抜く。

正價金拾五錢 郵税四錢

（卷 上）

第三編に示せしは實に九牛の一毛に過ぎず即ち定石は通常分ちて置碁定石、互先定石の二つあり前に示せしは置碁定石の一分のみ本編に於ては細末利を争ひ互に一步も譲らざるの手段を採るものなり其變化の赴く所顯るべからず玄妙愈々妙。

正價金拾五錢 郵税四錢

第六編 評 古今名家打碁集

釋

第六編 評 古今名家打碁集

（刊 既）

本編は年代順序にて本因坊歴代の系統井に圍碁手段の進歩變遷等を記せり是れ向家は世々名人の技倆ありしものにして其打碁は實に斯道の精華なるを以てなり髓頭には毎に對局者の出處経歴及物語等を畧記せり其参考に資する所甚多し。

正價金拾五錢 郵税四錢

第八編 互先定石集

第八編 互先定石集

（卷 中）

本編には小目に於ける三間夾より一間夾高掛り二間高掛り大斜走掛井に大目に於ける全部を既示せり互先の妙所は愈々本編に入りて自得する所多かるべし後編に進み所謂碁家の秘蘊悉く茲に完修するを得べし。

正價金拾五錢 郵税四錢

第九編 互先定石集 第十編 近世名人打碁集

（卷 下）

本編は目外に於ける高掛下掛及び小目掛四間拆浸分懸体等を既示せり以上互先定石は故人小林鐵次郎（七段）故人杉山傳雄（三段）兩人の遺編にして小林鐵太郎氏の編述に成れるものなり

正價金拾五錢 郵税四錢

（刊 既）

本書は享和元年より安政年間に亘れる五十餘年間に於ける名匠の打碁中其の尤なるもの四十局を精選し正しく年代を逐ひ之を順次に掲載せるものにして百五十手以上の手数を費したる打碁は百手毎に二面以上に分類し以て研究上觀覽に便せり

正價金拾五錢 郵税四錢

第十編 近古名人打碁集

第十編 近古名人打碁集

（刊 既）

本書は正保の昔より寛政の末年に亘れる百五十餘年間に於ける名匠の打碁を撰擇し正しく年代を追ひ之を順次に掲載せるなり較する處の棋譜は棋聖遺策のもの最多く元丈、知得の對局之に次ぐ

正價金拾五錢 郵税四錢

續刊

第十編 續刊 今代名人打碁集

（全壹冊）

以上十二冊を以て本全書を完結す第一編以下御入用の御方は取揃へ御注文あらんことを希望す

十七世 土屋秀榮校訂
本因坊

新撰圍碁錦囊

冊三全

●正價金七拾錢 郵稅四錢

世に排悶抒情の具鮮なからずと雖其技の
温雅高尚にして最も趣味深きものは圍碁
を以て第一とすべし本書は斯道の大家十
七世本因坊秀榮翁の校訂になり天地玄黄
日月星辰虚々實々秘術を指導せらる一局
の輸贏以て半日の閑も消すべし以て百年
の清興を領すべし

圍碁大家 巖崎健造君序文
圍碁大家 小野五平君序文

圍碁と將碁

冊一全

●正價金廿五錢 郵稅六錢

本書は圍碁及び將碁の秘術方畧を縱横詳述し併せて古
今斯道の大家が奇謀好策雄雌を決したる手合の實例を
添へ一讀人をして其好手妙案神機秘術を知らしむるに
あり而して書中收むる所は原始、順序、新古の定石、
批評註釋圖解等を細羅し盡頭又趣味ある事項を滿録す
興味津然紛々たる在來の書と大に其趣を異にせり請ふ
綴々御愛讀あらんとを希望す

繪口 ●圍碁の圖(彩色木版) ●寺島廣業筆 ●碁歌美人
●榊福舟 ●榊碁盤 ●少碁圍碁 ●美人圍碁 ●
●碁客不來美人對花 ●京都萬花園 ●箱根早雲寺
●茶室 ●名古屋秋琴樓

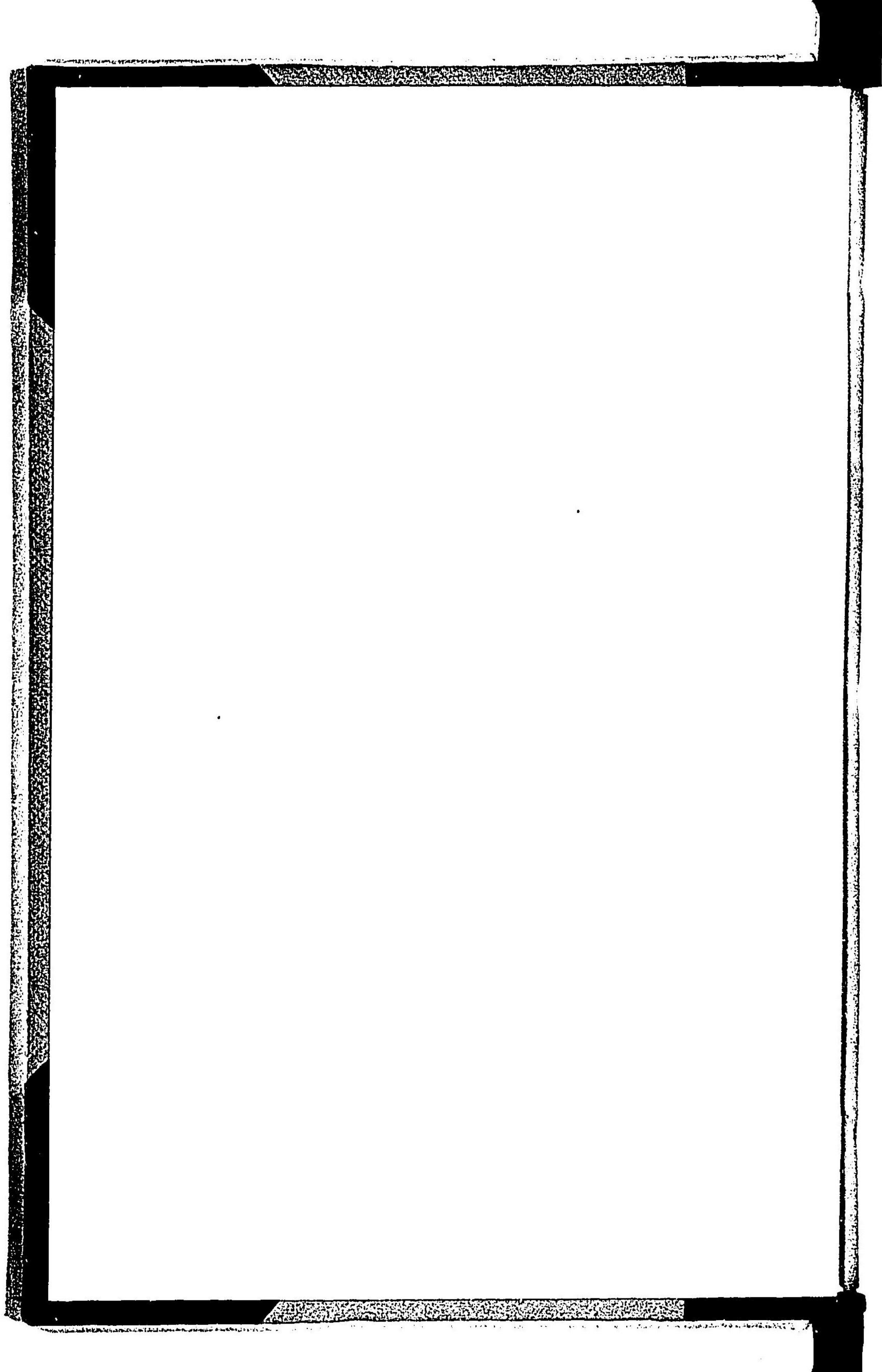
(内外遊戯全書)

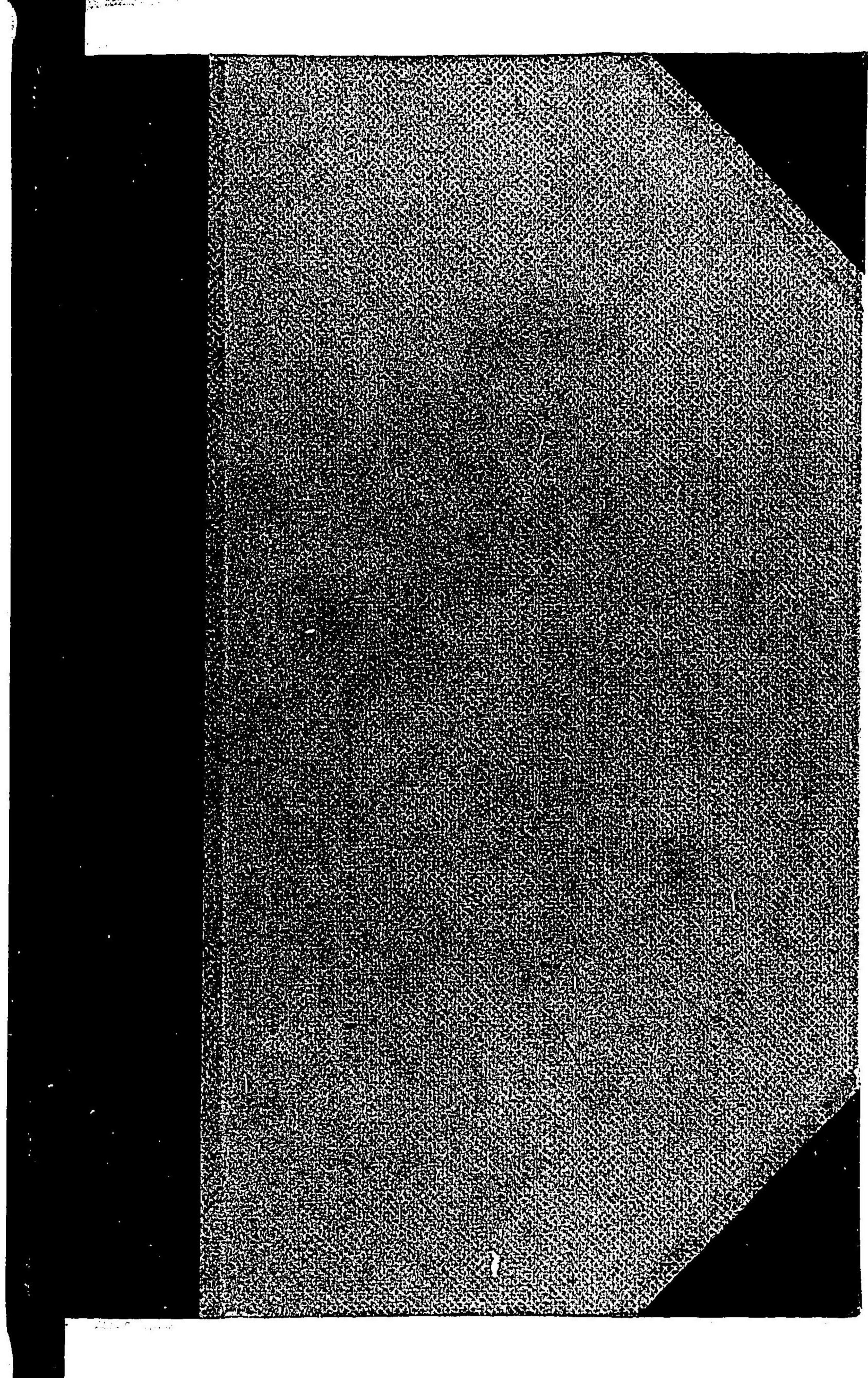
全五拾部冊完結

健全なる精神は健全なる身體に存すると實に精神身體の保育は須らく兩
々相並行せしめざるべからず殊に學生の體軀健全活潑ならされは中途に
廢學する虞あるのみならず往々夭折の不幸を見るあり今や内外遊戯全書
出づる豈に偶然ならんや

- | | |
|-------------|--------------|
| 第壹編 ●端艇競漕 | 第八編 ●陸上競走 |
| 第貳編 ●新游泳術 | 第九編 ●鳥獸狩獵法 |
| 第參編 ●ベリスポット | 第十編 ●室内遊戯法 |
| 第四編 ●射的術及弓術 | 第十壹編 ●昆蟲採集 |
| 第五編 ●銃獵案内 | 第十貳編 ●魚集 |
| 第六編 ●庭球術 | 第十參編 ●馬術 |
| 第七編 ●玉突術 | 第十肆編 ●福引 |
| | 第十伍編 ●蹴鞠と自轉車 |

正價 ●壹冊金拾貳錢 ●六冊前金六拾六錢 ●拾貳冊前
金壹圓貳拾五錢 ●郵稅壹冊金四錢御注文前金 博文館 發兌





788.1

M466A2

事故本

乱丁

(P1~2と
P3~4の逆)

075529-000-4

788.1-M466s2

相撲大観

三木 愛花

山田 春塘 / 編

M36

CEM-0476





336950

